

被服領域指導における教材開発 (その2)

坂本典子*

阿部照美**

1. はじめに

被服領域指導における教材開発 (その1)⁽¹⁾ において、スモック及びパジャマ上衣の「そでの構成」をどのように指導したかについて報告した。

中学校技術・家庭科の被服領域では、「被服Ⅰ」でスモック、「被服Ⅱ」でスカート、「被服Ⅲ」でパジャマという題材指定があり、その製作を中心に学習が行われているが、何れも市販の型紙を使用しての製作である。被服は、布という平面を使って立体を構成し、人体の各部を被うのに適切な型に縫合していかなければならないが、現行の被服学習では、後半の縫合にかなりの時間がかけられており、「平面から立体を構成する」という構成学習については、殆んど重きをおいていない傾向がみられる。つまり、使用させている市販の型紙が、どのような過程を経て作りだされたものであるかの学習は抜きにして、上衣であれば胸囲で、下衣であれば腰囲で、各自の採寸から得た寸法によって、型紙を選ばせるという方法をとっている。そのことから布の組み合わせに際してとんでもない部分で縫い合わせてみたり、特にそでについては、そで山がなぜカーブしているのか、又カーブの緩急がなぜできるのかは、理解されないままに、ひたすら縫合の作業をさせることに四苦八苦する傾向がみられた。

そのことから「わかる授業」の一環として「そでの構成学習」の実践報告をしたのである。

今年度は、昨年の実践の不備を改善しながら、今年度1年生のスモック製作のまとめとして「そでの型紙の成り立ち」を学習させることができたので、改善点その他、新たな発見を加えて最初に報告しておきたいと思う。

さらに今年度は、構成学習の一環として、新たに頭部をおおう被服である。「帽の構成学習とその製作」を教材化することができた。頭部は静止体ではあるが、球形の部分をおおうということで、布という平面をどのように立体化すればよいかを学習するには、極めて適切な教材になり得るのではないかということに着目したからである。採寸という作業、展開図(型紙)を作る作業等についても、外観として形が捉えやすいという利点、さらに縫製についても必要とする用布が僅かであること、縫合の作業についても、布が小さいという点で、比較的短時間で完成が可能であるという利点をあげることができる。

なお、今回の「頭部をおおう被服の構成学習」は、1年生の実践と合わせて、3年生における「保育」の「幼児服の製作」のなかで同じく「帽子づくり」の実践を取りあげてみた。同じ題材であっても、1年生と3年生という発達段階のちがいによって、生徒の対応や反応がどうであったかを含めて、今回の実践報告としていきたいと考えている。

* 新潟大学教育学部

** 新潟市立白新中学校

2. そでの構成学習の新たな試み

(1) 指導計画

被服1の指導計画における構成学習の位置づけは1図のとおりである。

2	16			2	10		2	3	
スモックの構成	製作の計画	製作の準備	裁断・印つけ	本縫い	逆カーブの縫製	本縫い	仕上げ	そでの型紙の成り立ち	帽子作り

注(1)

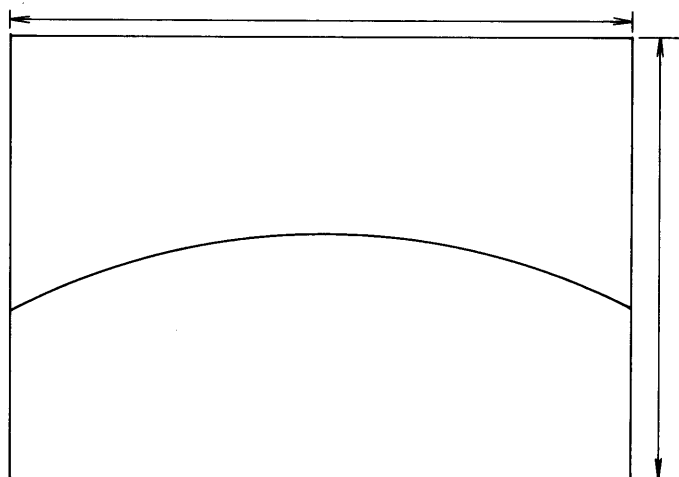
注(2)

注(3)

1図 指導計画上の位置づけ

注(1) スモックの構成では、主として型紙各部とからだとの相互関係を中心に、ゆとりの必要性や組立てについて理解させる程度にとどめる。型紙に用いる用語を実際と結びつけて理解させる。型紙を構成する枚数やからだの部分と対比させながら、各部分の型紙の特徴をとらえさせる。

注(2) 本縫い(そでつけ)の直前に、逆カーブの縫製の試し活動を設定した。2図の型紙を用いて、待ち針を打ち、しつけ、ミシン縫いを体験させながら、逆カーブの布を合わせる時のポイントを見つけさせる。



2図 逆カーブの型紙

注(3) そでの型紙のなりたち

新大教育学部附属教育実践研究指導センター研究記要5の41ページから59ページに公開した実践の内容を新たに次のように試みた。

(2) 授業の実際（指導計画の「本時の指導」参照）参考資料①

① 4枚のそでの型紙の比較

スモック・パジャマ・ブラウス・上着の4枚の型紙（そでだけ50cm）を提示して相違点を書き出させる。

10人に1人は4点の相違を見つけている。20人に1人は3点見つけている。全体の44%の生徒が2つの相違点を指摘し、残り41%の生徒も1つのちがいは見つけている。相違点の内容で最も多くの生徒が指摘したのは、カーブの曲がり具合がちがうという点である。次に多かったのがそで幅のちがいで、そで山の高さのちがいで、そで下寸法のちがいで、そでぐり寸法のちがいの順に指摘している。

- 予想なんだけど、服の種類によって、そで山の高さがちがっている。
- スモック・パジャマ・ブラウス・上着の順にカーブが急になっている。
- 上着が一番そで山が高くなっている。
- カーブの曲がり具合がどうしてこんなにちがっているのだろうか。

黒板に張られた4枚の型紙を見て、目ざとくその相違点を指摘している。そして、そでの型紙のなりたちについて問題意識を持ちながら次の展開に望んでいる。

② 腕の運動量と服の種類

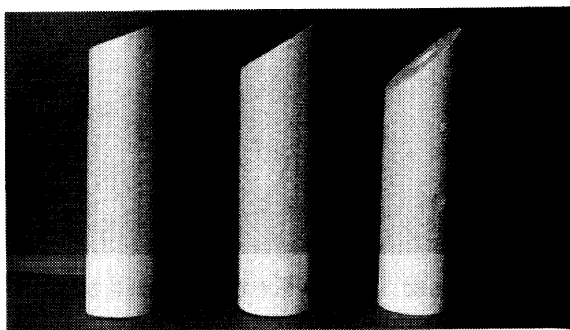
作業着・ブラウス・上着のそでを全員の見ている前であげてみて、しわがよる寸前でストップして、腕のあがり具合を比較させる。前述の紀要46ページの写真6図で的確にとらえさせる。

③ そでの型紙のなりたち

任意のそで（ブラウス）の型紙を生徒の見ている前で組み立てて見せる。（セロテープで2～3ヶ所をとめる）一本の円筒が出来上がったのを、教卓の上に立てて見せる。そでぐりの斜辺に注目させ、ある角度で、斜めに切った切り口であることに気づかせる。再び、セロテープで2～3ヶ所をとめる）一本の円筒が出来上がったのを、教卓の上に立てて見せる。そでぐりの斜辺に注目させ、ある角度で、切り口であることに気づかせる。再び、セロテープをはずして、もとの型紙になったことを確認させる。そでの型紙は、円筒をある角度で切って、展開したものであることに気づかせる。

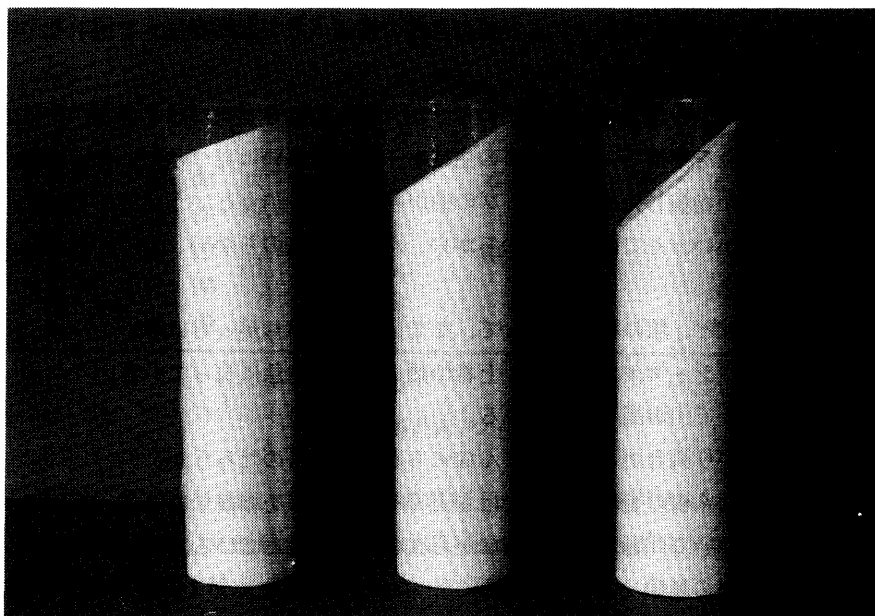
④ 作業の手順と方法

3図のような発泡スチロールの円筒を任意の角度（20° 30° 40°）で切断したものをを用いる。（R 3.5 cm、長さ30 cm）



3図 発泡スチロールの円筒

それぞれの円筒にビニールシートを巻いた状態は4図のようになる。



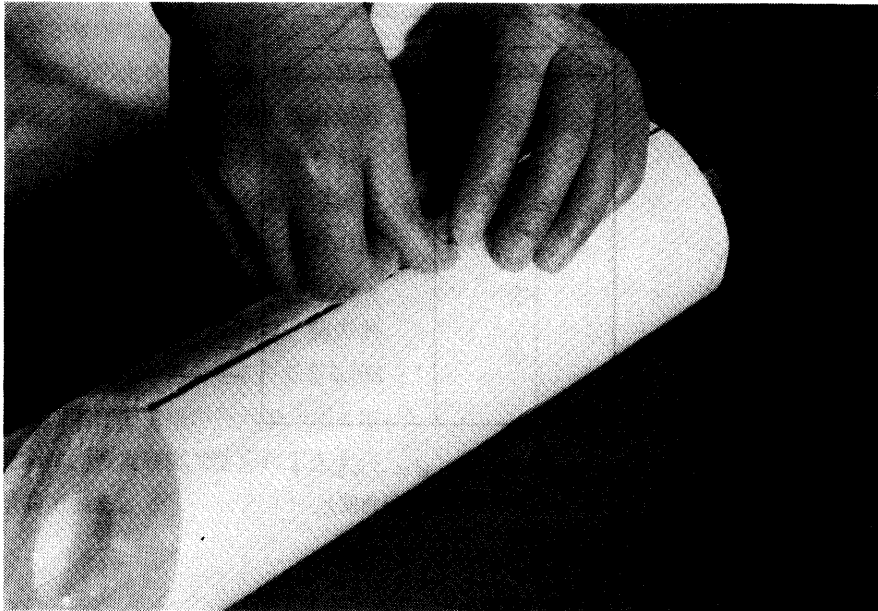
4図 ビニールシートを巻いた円筒

ア. まず、ビニールシートをそで下線に垂直に合わせてから、テープで固定する。上端は、1 cm 残しておく。



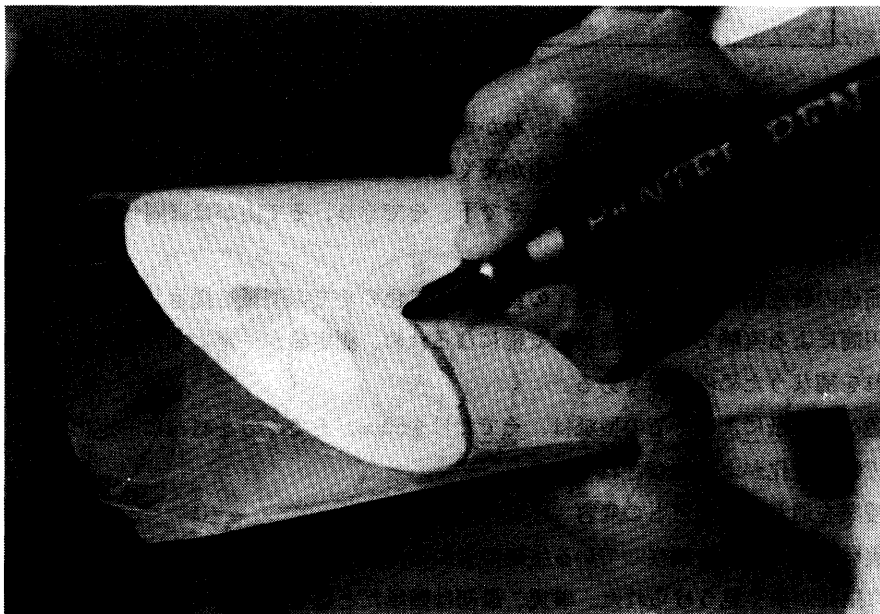
5図 ビニールをそで下線に合わせる

イ. ビニールシートがたるんだり、よじれたりしないようにまきつけてから他の端もテープで固定する。



6図 セロテープで固定する

ウ. 油性のペンで、カーブをなぞる。そで下線の上部和下部にもしるしをつけておく。



7図 ペンでなぞる

エ. ビニールシートをはずすと8図のようになる。そで山線、そで下線を書く。

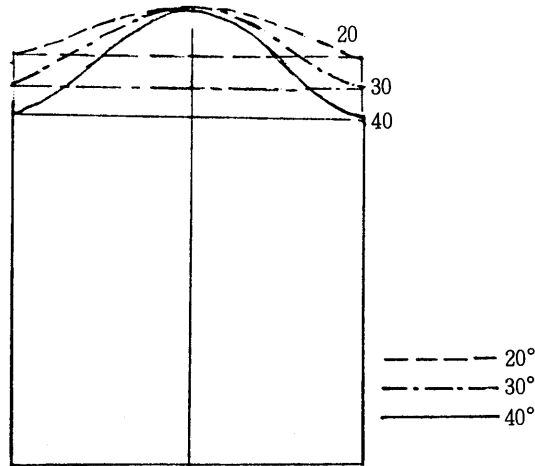


図8 完成したビニールシート
(数字は傾斜角度)

測定結果は、1表のとおりである。

表1 測定結果(単位cm)

傾斜角度	項目	そで山	そでたけ	そで幅	そで下	そでぐり
20°		2.7	30	23	27.3	24
30°		4.6	30	23	25.4	26
40°		6.5	30	23	23.5	28

作業全体を通して気づいたこと、わかったことは、次のようなものが多くあげられた。

- 傾斜角度が大きくなるほどそで山が高くなる。
- そでたけとそで幅が一定の時は、そで下、そでぐり、そで山がほぼ同じ割合で変化する。

⑤ 着用目的とそでの形

前述の研究紀要45ページの表1の黄・水・赤色のそでの型紙を提示して、変化を観察させる。

円筒による実験では、円周がそで幅になるため、測定値が一定になってしまう欠点がある。それを補なうための提示である。

色ケント紙によるそでの型紙は、そでたけを50cm、そでぐりを41cmに一定にしているので、そで幅の変化がよく観察されている。

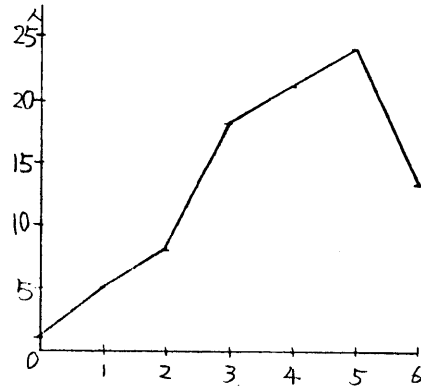
⑥ 授業を通しての子どもの変容

実験方法の師範を観察している生徒の姿には、「なあって簡単じゃないか」という印象を持った生徒が多く見うけられた。事実、最初は簡単だと思って実験にとりかかった生徒がほとんどである。しかし、参考資料2のように、むずかしいと思いこんでいた生徒も10人に3人はいた。むずかしさやめんどくささや時間がかかりすぎると感じた生徒は35%になったが、全体としては、授業に満足している生徒が5%、ためになった等有益性が16%、簡単にできた等、

順調にいったとするものが28%となっており、積極的に取り組んでいた様子がみられる。3%の生徒が最初に挫折する場面があったが最後には、生き生きと取り組む姿が見られた。実験方法や手順は、まだまだ工夫の余地がある。また、家でやってみたい等、積極的な姿勢を見せた生徒が3%いて意欲づけられた。

授業後の形成テストの結果は、9図のとおりである。

全問正解者は18%、全問誤答者が1%。6問中5問正解で1問だけまちがえた生徒が30%、2ヶまちがえた生徒が25%である。ほぼそでの構成学習の目標に成した生徒が合わせて73%であった。最も低い達成度のか所は、腕のあげにくさとそでの形のところである(63%の達成度) そで幅が円周で一定となるために、授業展開でさらに工夫すべき場面である。



9図 正 答 数

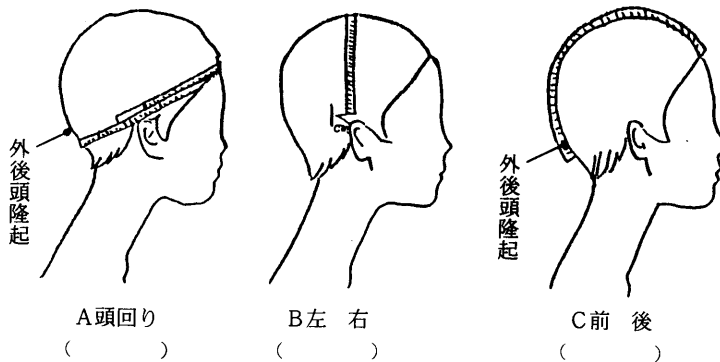
3. 頭部をおおう被服の構成学習

(1) 中学1年生における実践

指導計画におけるぼうしの構成学習の位置づけは1図のように、スモック製作の直後に設定した。この時期は、ミシンの操作にも相当なれて、自信が持てるようになっていることと、採寸も正確に測定できること、型紙を選択するのではなく各自で作るということ等を考え合わせて最適な時期と判断した。

① 授業の実践

ア. 採寸か所と採寸



10図 採寸か所

採寸か所は、頭回りと左右と前後の3か所とした。2人1組に組ませて、被検者はいすに腰をかけて、外後頭隆起を指で押えさせる。測定者は、立って測定させる。頭回り(A)は、前頭部の髪のはえぎわから後頭部のいちばん出ている部分(外後頭隆起)より指2本分(2~3cm)下がった位置を通るようにメジャーを回して、ゆとり指1、2本入れてはからせる。左右(B)は、左右の耳のつけ根より1cm上まではからせる。

前後(C)は、前頭部のはえぎわから、後頭部の外後頭隆起より2cm下まではからせる。

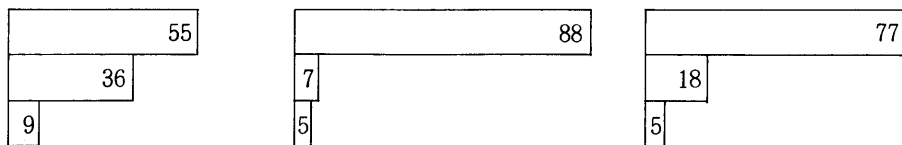
中学生(1年、2年、3年女子)の頭部の寸法は、表2のとおりである。2年生の測定値が3年生より少し大きくなっているが、学年の特徴か、ゆるみの入れ方の不正確なためと思われる。中学生の頭回りの平均値は55.3cm、左右の寸法は29.6cm、前後の寸法は29cmとなった。平均値で比較してみると、左右と前後の寸法は、2・3年生は、左右の方が大きく、約半数が1cmの差である。1年生は、半々に分かれている。左右と前後が同寸の生徒が8~14%となっている。

表2 中学生の寸法

学年 \ 名称	頭回り	左右	前後
1	54.3 ^{cm}	29.1 ^{cm}	28.7 ^{cm}
2	56.1	29.9	29.5
3	55.4	29.7	28.9
平均	55.3	29.6	29.0

- 左右の寸法と $\frac{1}{2}$ 頭回りの比較
左右の寸法が頭回りの半分になった生徒が2~6%である。80~91%の人は、左右の寸法は、 $\frac{1}{2}$ 頭回りより大きくなっている。その差が1cm以下の生徒が35%、2~3cmの差が40%、ほぼ4cm以内の差となっている。
- 前後の寸法と $\frac{1}{2}$ 頭回りの比較
前後の寸法と $\frac{1}{2}$ 頭回りが同寸の生徒が4~7%である。前後の寸法の方が大きい生徒が69~80%となっている。その差が1cm以下の生徒が39%、2~3cm差が35%、4~5cm差が18%となっている。(11図)

11図 各部の寸法の比較

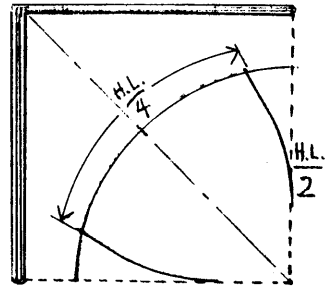


前後より左右の大きいもの $\frac{\text{頭囲}}{2}$ より左右の大きいもの $\frac{\text{頭囲}}{2}$ より前後の大きいもの

授業では、左右の寸法と前後の寸法を $\frac{1}{2}$ 頭回と同寸にして型紙の寸法に取り入れた。採寸に要した時間は、10分である。

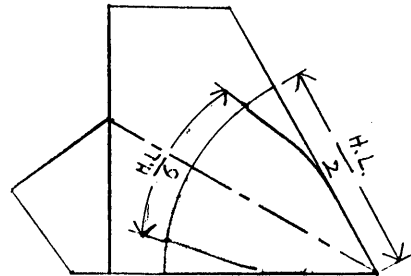
イ. 形を選択

帽子の形を、4枚、6枚、8枚はぎとして、つばなしとした。結果的には、55%の生徒が4枚はぎを選択し、45%の生徒が6枚はぎを選択した。8枚はぎは敬遠されたようである。



ウ. 型紙づくり

紙を $\frac{1}{4}$ ($\frac{1}{6}$) にたたみ、コンパスで $\frac{1}{2}$ 頭回りの半径で円をえがく。円周の中央より、 $\frac{1}{4}$ 頭回りの寸法をとり、中心より曲線で結ぶ。(12図) 4・6・8枚はぎの曲線は13図のようになる。



ハサミで、余分な部分を切り落とすと14図のようになる。

12図 紙のたたみ方

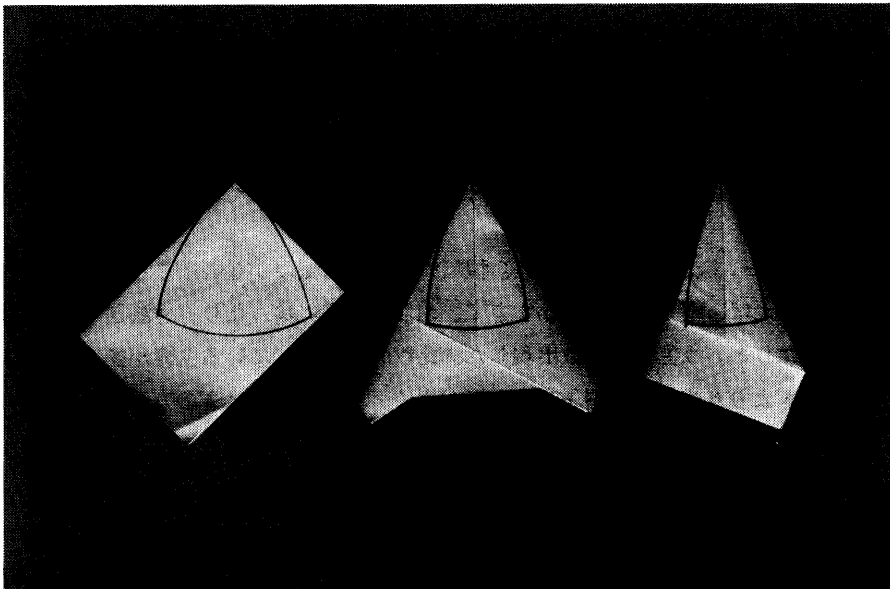


図13 4・6・8枚はぎの曲線を書く

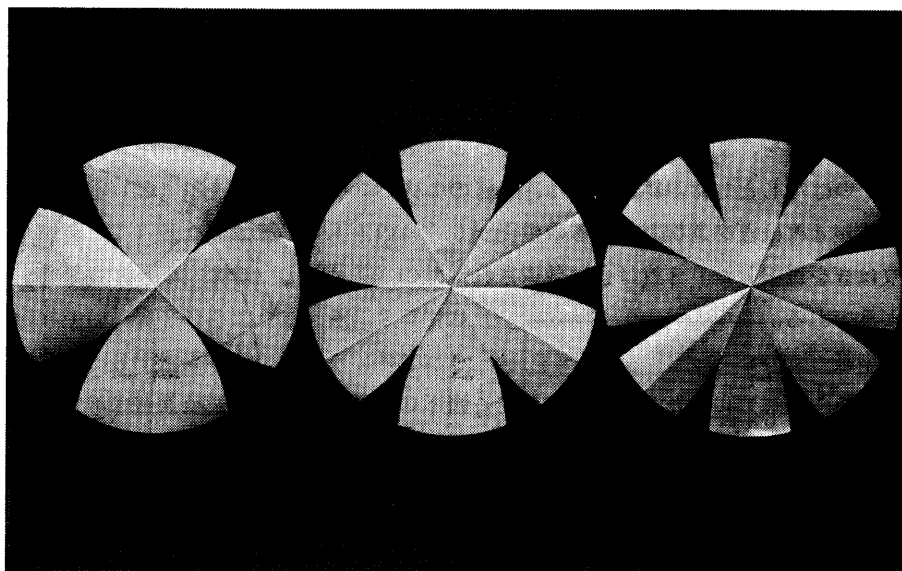


図14 型紙の出来上がり

エ. 布 裁 断

布の上に型紙を固定し、ぬいしろを1cmに裁ち切り線のしるしをつける。出来上がり線のしるしをつけて、布を裁断する。

オ. 仮 縫 い

ダーツ分を待針でつまみ、かぶって補正する。2人1組になって補正し合う。

カ. 本 縫 い

しつけをかけて、ミシンをかける。縫い終りは返し縫いをしないで、結んでおく。縫いしろのしまつは、ピンキングで切る。周囲は同系色の接着バイアスで始末をする。

キ. 発 表 会

帽子をかぶって、発表会を行なう。型紙づくりでは気づかないところを見つけ合ったりできる。たとえば、帽子の丈が短かすぎて、お皿のようになったり、寸法通りに作ったのに、きつかったりという生徒が少数出現した。比較的頭に合っている生徒が多くいた。(15図)

4枚はぎより6枚はぎの帽子の方が形がよく、さらに8枚はぎの方が形がきれいに出る。(16図)

ク. 授業後の感想

資料3に示したように、21%の生徒は終始興味・関心を示しながら取り組んでいる。30%の生徒は、帽子を作れたことに十分満足している。家でも作ってみようという生徒が3%になっている。

困難点は、次のような場面である。

- しるしつけ
- 型紙づくり
- ふちのしまつ
- カーブを縫う

また挫折する場面は

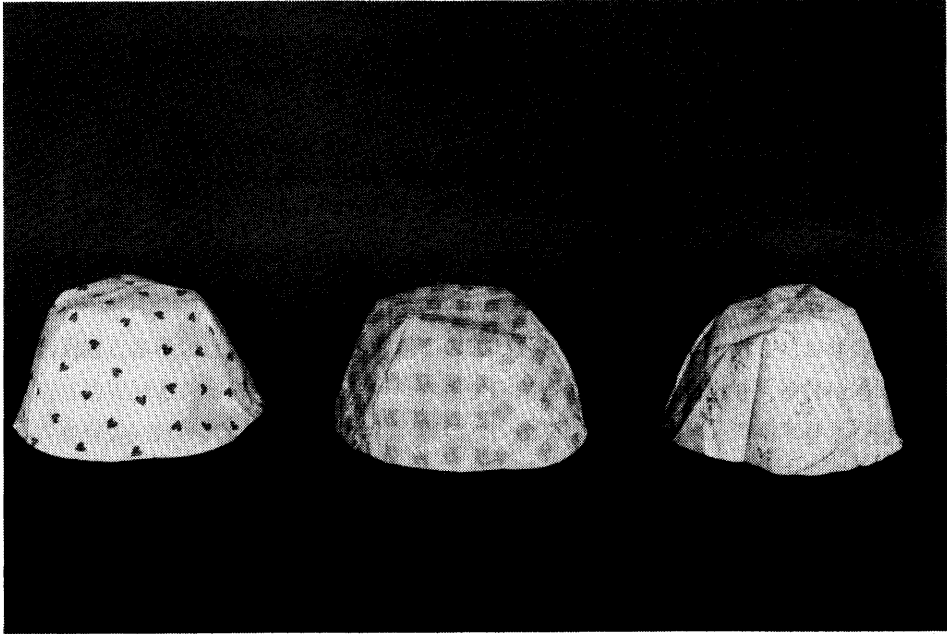


図15 手作りの帽子

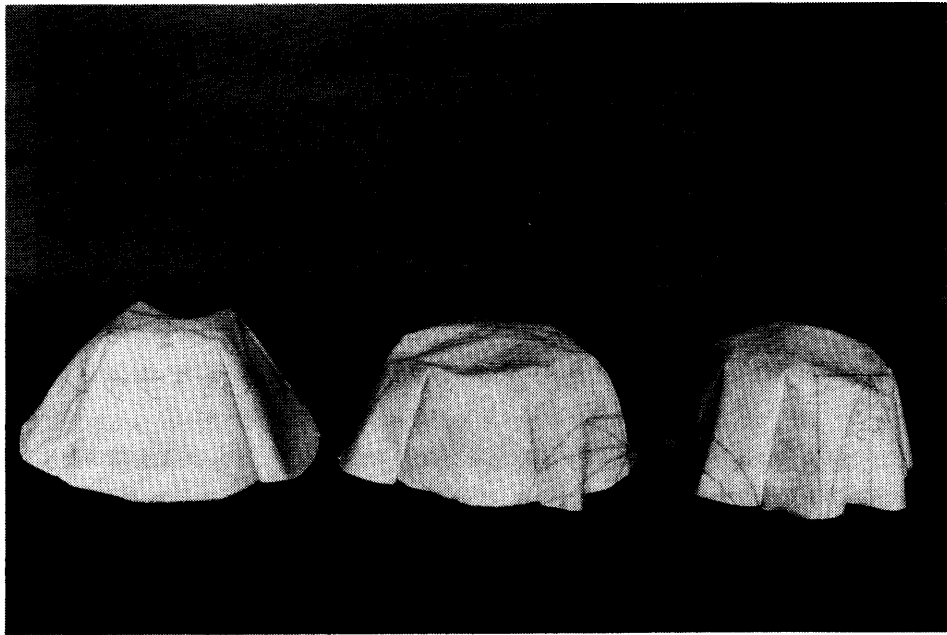


図16 4・6・8枚はぎの帽子

- 型紙の切り込みの深さ
- 形のとんがり
- しるしつけ などである。

(2) 中学3年生における実践

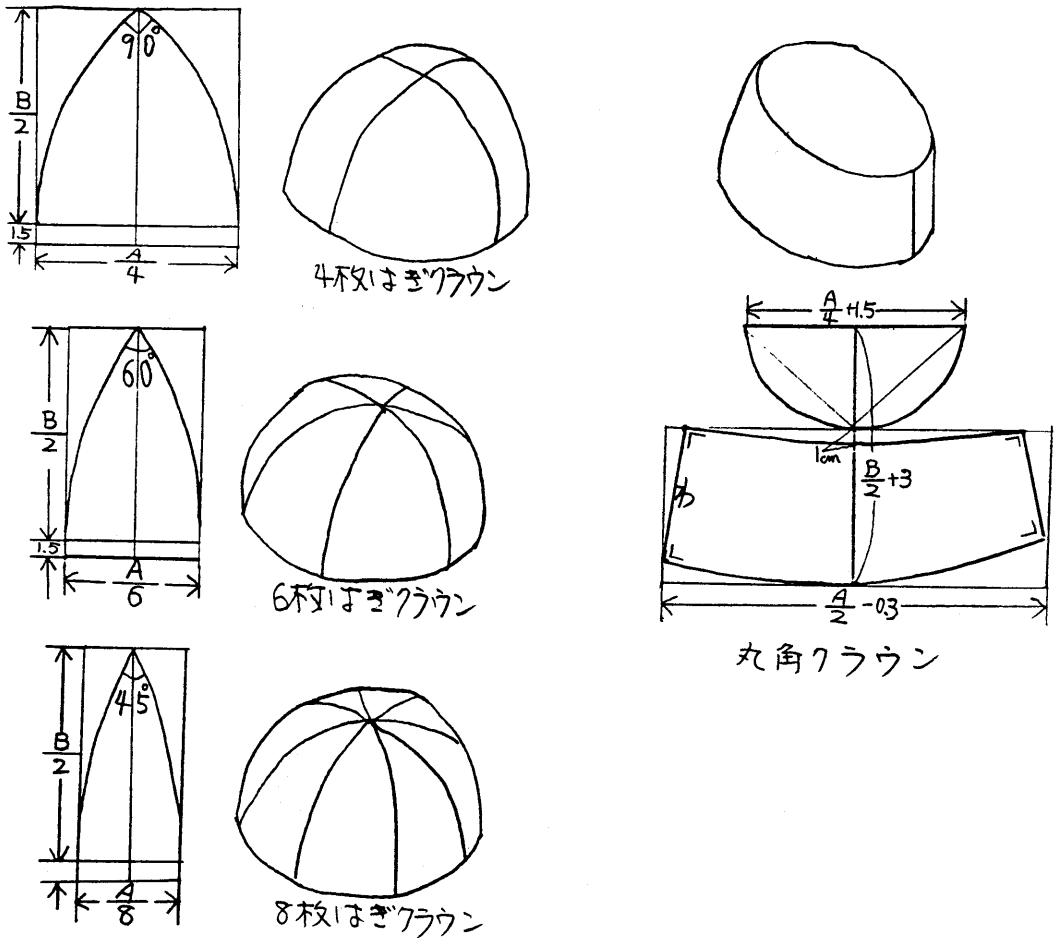
3年生の場面は、保育の幼児服の製作の場面に位置づけて実践した。

① 採寸か所と採寸

採寸か所は、10図に示したように、頭回り、左右、前後の3ヶ所にした。測定の仕方は1年生の実践に準ずる。

帽子の形は、2枚・4枚・6枚・8枚はぎの4種類とし、つばなしにする。2枚はぎが5%、4枚はぎが47%、6枚はぎが48%の選択率である。

② 型紙づくり



17図 型紙の作図

型紙は、対象児の頭回りを採寸した寸法を用いて作図をする（17図）ほとんどの生徒が51～53cmの頭回りで作図をしていた。対象児の寸法を実測できない生徒は3表の参考寸法で作図をする。

表3 子ども帽子参考寸法

名称 \ 年齢	1～2才	3～4才	5～6才	7～8才	9～12才
頭回り	48～50	51～52	53～54	54～55	55～56

③ 布裁断と本縫い

布は幼児服と共布にする生徒が多く、パジャマの残り布なども用いていた。縫い代は1cmとし、布目方向は、たて方向に用いた。縫い代の仕末はロックミシンで始末をし、縫い代はアイロンできれいに割る。ふちは、三つ折りミシン縫いまたはバイアスで仕末をする。

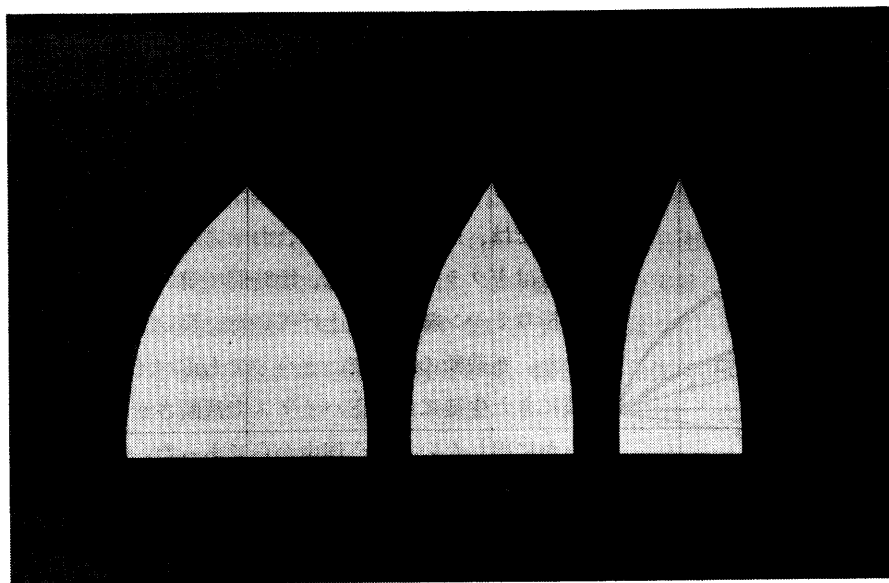
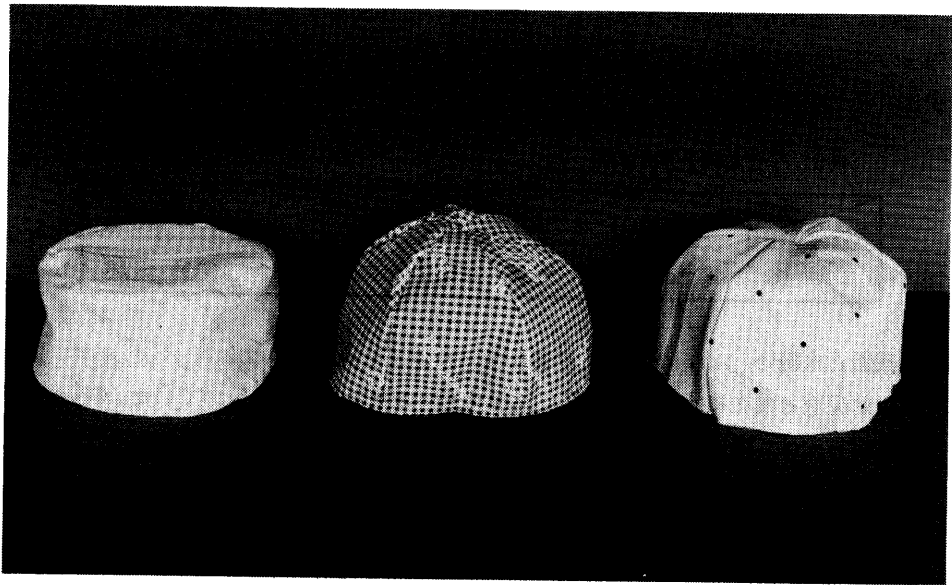


図18 4・6・8枚はぎの型紙

③ 生徒の創意工夫

頭囲は、ただぐるぐるとはかれば良いと思っていた生徒が多かったが、慎重に測定をしていた。布は、新たに購入するのではなく、家にある余り布を利用したこともあってか、一色で裁断を始めたが、途中で、布の交換などがあり、2色、3色で6枚はぎクラウンを仕上げていた。2色は発表会の時、好評であったが、3色はカラフル過ぎるという評が多く出ていた。つばをつけたいと相談してきた生徒には、型紙づくりの段階で対応し、つばつきの帽子を作らせた。つばの作図は21図のようにした。



A 丸クラウン

B 6枚はぎクラウン

C 6枚はぎクラウン

図19

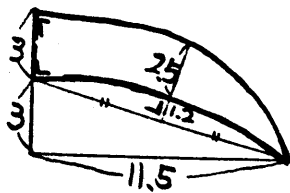


図21 プリム(H.S51cm)

丸クラウンは、みごとに作図ができ、十分満足していた。本縫いでは、逆カーブの布の合わせ方に少し時間をかけていたが6枚はぎクラウンよりは、短時間で縫い上げていた。ふちは三つ折りミシン縫いで仕上げていた。良い立体感がでて満足していた。布裁断の段階で、どうしても正バイアスでとりたいと相談にきた生徒には、正バイアスで裁断させてみた。曲線をなめらかに出したいという理由からであった。結果的には、クラウンの形そのものだけを見ると他の形に比べたら、少し形良く出来上がったが、ふちの仕上げの時、布がのびてしまってドレープ状に出来上がってしまった。

反省では、作業がしにくかったと発表していた。

ふちをクラウンと続けてとれるかと相談にきた生徒には、22図のように作図させた。つばの長さ(D)は3~6cmを適宜選ばせて作図させた。つばの部分は二重にし、接着芯を入れて、何回もステッチをかけさせた。

トップにくるみボタンをつけたいという生徒には、共布で持ち合わせのボタンをくるんでつけさせた。発表会では、とても効果的だとほめられていた。

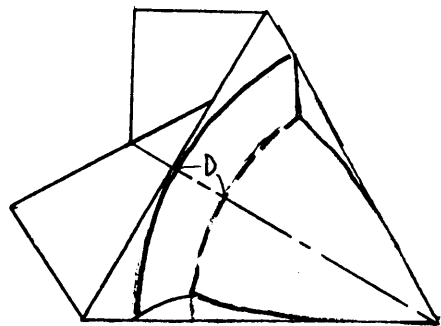


図22 つばのある場合

(3) 被服構成学習における生徒の発達とのかかわりあい

中学1年生と3年生に「帽子づくり」の授業を実践してみて、次のような相違に気づいた。

- 学習目標のたて方によって、1年生でも3年生でも効果的であること。
- 1年生の後半に位置づけをしても、切り込みを曲線に近いカーブで縫うのは無理であること。やや直線に近いカーブになってしまうこと。
- 縫い止まりがピタリと決まる生徒が少なく伸びたり、手前で終わってしまったりすること（形のとがりなどに影響する。）
- どこどこを合わせるかの予想ができない生徒が半数以上いること。しかしちょっとヒントを与えるとほぼ完全に組み立てられる。
- 3年生では、採寸寸法による作図が可能であること。
- 組みたて方などよりデザインに創意工夫が幅広くくり広げられること。
- 3年生の発達段階では、不可能なことや、とっ拍子もないようなことはやろうとしないこと。
- 能力（技能）にふさわしい創意工夫をしていること。
- 一律に、同じデザイン、同じ型紙、同じ布でという画一的なものではなく、自分の手で作図した、自分のデザインを大切にする意識が作品づくりにまで影響を及ぼしていた。
- 成就感・満足感がひととき強く味わえること。

全体的に、1年生は1年生なりに、3年生は3年生なりに、アイデアを出し合い、考えぬいて、帽子づくりに一心不乱に取りくむことがわかった。そこからは、学年相応に充実感を味わうことができたようである。特に1年生の、スモックで人一倍苦労した生徒程喜びが大きかったのがとても印象的である。中学校の頭初の製作学習は、この成就感や充実感こそが大切ではなからうかと考えたわけである。長期間かけないと完成しないような物ではなく、短期間で完成し、製作学習のパターンがひととおり含まれている教材として、帽子を1年生に位置づけてみたわけである。

4. 帽子の教材化

(1) 指導計画上の位置づけ

年間指導計画上の位置づけは、次の2通りが考えられる。指導のねらい等によって位置づけを吟味する必要がある。

- ① 製作学習のひとつの要素を含んでいることから、最初に体験学習させる。製作学習（布加工）の基礎・基本を体得させることができる。
- ② 短期間で完成し、製作学習の基礎・基本が体得できる。技能的にも困難な場面もなく、作品を利用する機会も、日常生活の場面にある。男女共学も可能である。

(2) 学習内容と配当時間

1	1	1	1	4	1
採型紙づくり	布裁断	仮縫い	補正	本縫い	まとめ

20図 帽子作りの指導計画

学習内容は、採寸、型紙づくり、布裁断、仮縫い、補正、本縫い、まとめの7項目とし9時間を配当した。それぞれの時間配分は20図のとおりである。

(3) 材料の準備

- 大洋紙 $\frac{1}{4}$ 枚
- 布 90cm幅 40~50cm 144cm幅 30cm布地—ソフトデニム、綿ギャバジンなどの張りのある木綿の他、フラノなどのウールを季節に合わせて選ばせる。
- サイズリボンには、グログランリボンを使用する。(60cmあればよい)厚手がよい。色は髪の色に合わせる意味で黒が一般的だが、同系色を用いてもよい。

(4) 学習への導入

6枚はぎクラウンのバラバラな布6枚を提示し、「この6枚の布をそれぞれ、縫い合わせると何になるか?」を発問する。帽子の完成品を見せたり、帽子づくりのアウトラインを説明する。

(5) 採寸

採寸か所は、頭回りと左右・前後の寸法の3か所を測定させる。2人1組で測定し合い、記録用紙に記入する。採寸時には、ゆとり指1~2本入れてはからせるとよい。

(6) 型紙づくり

大洋紙 $\frac{1}{4}$ を二つ折りにする。更に二つ(三つ、四つ)折りにする。コンパスで、 $\frac{1}{2}$ 左右の寸法を半径とする円を描く。中心線より、左右に頭回りの $\frac{1}{4}$ ($\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{8}$)の寸法だけとり、円の中心と曲線で結ぶ。

この段階で、曲線の描き方、深さなど点検する。合格した生徒から、余分な所をハサミで切り落させる。

(7) 布裁断

布の表裏の見分け方、布のたて方向と横耳の特質、ぬい代の分量などごく基本的なことを押える。

布の裏面に型紙を固定した段階で点検する。合格の生徒は、はさみで切り始める。縫い代はダーツは続けてとり、ふちは2~3cmとする。(仮縫い後1cmにする)

(8) 仮縫いと補正

ダーツ分を待針でつまみ、2人1組になって、かぶりながら形を補正し合う。

ダーツの長さ、深さがよいかどうか、ぼうしの深さが頭の大きさにあっているかどうかを見合う。形の補正の必要なか所は、待針を止めなおして、かぶせながらなおしていく。チャコペンで形を補正した部分に補正線をかき、縫いしろ分を取って、余分な布は切り落とす。ただしダーツ部分は、線の書きかえだけで、布は切り落とさないでおく。

(9) 本縫い

- ① 前クラウンと横クラウンを中表に合わせて地縫いする。
- ② 縫いしろは仕上げまんじゅうの上で割りアイロンをかける。つぎに横クラウンと後ろクラウンを地縫いする。この時、縫い止りは、バックしないで、結んでおく。縫い目は伸ばさないように注意する。
- ③ 同じように、他のクラウンも中表に合わせて地縫いをす。縫い止りがずれないように、半返しでしつけをしておくとよい。

- ④ つばは、表・裏布を中表に合わせて縫い返し、裁ち切りのしんを入れて、表から好みの幅（0.3～0.5 cm）でステッチをかける。
- ⑤ つけ側に切り込みを入れ、でき上がりにアイロンで折り上げる。
- ⑥ つばと帽子の前中心を合わせて地縫いする。
- ⑦ サイズリボン（グログランリボン）は、出来上がり頭回りの寸法に重ねしろ（1.5 cm×2＝3 cm）をつけて裁ち、はぎ目は、後ろ中心にして、リボン幅の約 $\frac{1}{2}$ をまつりつけておく。
- ⑧ 帽子のでき上がり線の後中心から、前中心・サイド中心という順に、カーブによくなじませながら待針を打つ。しつけをかけて、地縫いする。

(10) 反 省

学習のまとめとして、完成した、帽子をかぶり、発表し合う。発表内容は次の項目にする。

- ① 布地が帽子にふさわしかったか。
- ② 型紙づくりが、思うようなデザインになったか。
- ③ 布裁断が、適切にできたか。
- ④ 本縫いが、しるし通りに縫えたか。
- ⑤ めいしろがきれい割れたか
- ⑥ サイズリボンがきれいについたか
- ⑦ 利用の仕方
- ⑧ 経 費
- ⑨ 製作の所要時間
- ⑩ 感想・反省（コメント）

5. 今後の課題

教育課程審議会は昨年10月20日、「教育課程の基準の改善に関する基本方向について」の中間まとめを発表した。その中での中学校の技術・家庭科についての検討の方向は、1つは現行領域の内容の見直しと、新たに2領域を加えて11の領域を設定したこと、もう1つは11領域の中から7領域以上を履修させることを原則とし、その場合、「木材加工」「電気」「食物」「家庭生活」（仮称）の4領域については、全ての生徒に履修させるということとして示されている。

領域の区分の設定については今後さらに具体的な検討が加えられるということであるが、女子の場合「木材加工」「電気」のどちらか1つしか履習していない学校がほとんどであったが、今回の中間まとめでは、2つの領域は必ず履習する方向が示されたことになる。一方男子の場合とはいうと現行においても「食物」の領域はかなりの高率で履習されていることから「被服」領域の履習も今後実現の方向で考えていきたいところである。

しかし「被服」領域を男子が履習している学校は、皆無に等しいというのが実状である。今回のまとめにおいても、「被服」の領域は「全ての生徒に履習させるもの」として取りあげられなかったのであるが、「被服」領域の選択履習の方向はどのようになるのか、学校選択として男女が履習することになるのか、個々の生徒の自由選択によって履習することになるのか現在のところでは、全く見当がつかない。しかし今回の改訂が、さきの「女子差別撤廃条約」の批准に関わって「家庭科に関する検討会議」が示した答申を受けてのことであることを合わせて考えるとき、男子が履習すべき領域・女

子が履習すべき領域と、性によって履習すべき領域を指定するという現行の指導要領の方向では示されないことは予測できる。

そのことから「被服」領域についても男女が共に履習することを前提に、内容の見直しの必要が迫られているといえよう。現行のスモック・スカート・パジャマの、製作一辺倒の被服学習では、男女とも履習する内容として適切であるとはいえない。しかし人間にとっての衣生活は、日常的に恒常性をもっていることから考えて、被服に関する基礎的技能と知識は、人間の生活的自立の観点から不可欠のものと思われる。

かつて職場の男性教師に「被服の分野で男子にも教えるとしたら、どんなことを教えてほしいですか」ときいたことがある。それに対して「僕はミシンが面白かったね。それとどんな繊維がよいか、どんな布が丈夫かなど自分が買物するときに必要な知識ってありますよね」と言っていた。要するに針が使えること、ミシンでかんたんな布の縫製ができることのほかに、衣服材料としての繊維や布についての基礎知識は男女ともに必要であるということである。

すでに現場においては、先生方の工夫によって、件数は少いが、ベスト・ショートパンツ・帽子・足カバー等々の実践や、繊維から糸、糸から布へなどの実践が、報告されている。今回は、それらの取り組みからヒントを得て、帽子づくりの実践を取りあげてみたのである。

初めての試みでもあり、実践したことによって新たな研究課題も見えてきたという実感があるが、構成や縫製の基礎が学習できる利点もあることから、今後の試行錯誤の中が、今回の不備な点はさらに改善しながら、よりよい教材として発展させていきたいと考えている。

(注) (1) 「新潟大学附属教育実践研究指導センター研究紀要」第5号、1986年。

参 考 資 料 1

本 時 の 指 導

学習の流れ	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点	教 具 ・ 資 料
<p>4枚のそでの型紙の比較</p> <p>そでの形と腕の運動量</p> <p>作業方法</p> <p>作 業</p>	<p>1.</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦カーブのちがい（急、ゆるやか） ◦そで山の高さのちがい ◦そで幅のちがい ◦そで口の幅 <p>2.</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦腕のあげやすさと、そでの種類 ◦外見と腕のあげやすさ ◦そでの形と腕のあげやすさ <p>3.</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ビニールの固定のしかた ◦カーブのなぞり方 ◦基点のしるしのしかた ◦ビニールのはずし方 ◦線のえがき方 ◦写し方 ◦測定ヶ所と測定のしかた ◦まとめ方 <p>4.</p> <ol style="list-style-type: none"> ① そで下線にビニールの端を合わせる。上部1cmは残して水平に合わせる。 ② セロテープで固定する。 ③ たるまないようにまきつける。他の端をテープで固定する。 ④ 油性のペンでカーブをなぞる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦スモック、パジャマ、ブラウス、上着(そで丈を50cm) <p>◦作業着・ブラウス・上着をそれぞれ着用した時の腕のあがる量を比較させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ひとつおりの作業の手順に従って、師範しながら次の点をおさえる。 ◦3枚のシートを一人でする。 ◦どれから始めてもよい。 ◦そで丈、そで下の寸法は、円筒の寸法にする。 ◦そで幅は23cmに一定する。 ◦半紙にはそで山線、線を共通にして、まとめてかく。 <p>4. 机間巡視をしながら、次のことがらを個別指導する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦4枚の型紙 ◦記録用紙 <ul style="list-style-type: none"> ◦ビニール3枚 (25×30cm) ◦円筒10本(20°) ◦" 10本(30°) ◦" 10本(40°) ◦セロテープ9台 ◦サインペン3色 ◦ルレット ◦半紙 ◦ものさし ◦画浜 ◦学習カード

学習の流れ	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点	教 具 ・ 資 料																								
<p>まとめ</p> <p>発表</p> <p>着用目的とそでの形</p> <p>スモックのそでの形の特徴</p>	<p>⑤ そで下線の上部と下部に しるしをつける。</p> <p>⑥ ビニールをはずす（テープもとりに去る）</p> <p>⑦ そで下線をかく。</p> <p>⑧ ワラ半紙にルレットで写す。</p> <p>⑨ そで山線、そで山をかく。</p> <p>⑩ そで山の高さ、そで幅、そで丈、そで下、そで口を測定する。</p> <p>⑪ 表に記入する。</p> <p>⑫ まとめをかく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 切口の角度とそでぐりのカーブのゆるやかさ。 ○ そで山の高さとかurveのゆるやかさ。 ○ そで山の高さとか腕のあげやすさ ○ そで山の高さとかそで幅 	<table border="1" data-bbox="666 552 1030 691"> <thead> <tr> <th></th> <th>そで山</th> <th>そで幅</th> <th>そで丈</th> <th>そで下</th> <th>そでぐり</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>20°</td> <td>2.7</td> <td>23</td> <td>30</td> <td>27.3</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>30°</td> <td>4.6</td> <td>23</td> <td>30</td> <td>25.4</td> <td>26</td> </tr> <tr> <td>40°</td> <td>6.5</td> <td>23</td> <td>30</td> <td>23.5</td> <td>28</td> </tr> </tbody> </table>		そで山	そで幅	そで丈	そで下	そでぐり	20°	2.7	23	30	27.3	24	30°	4.6	23	30	25.4	26	40°	6.5	23	30	23.5	28	<p>そでの型紙 3枚セット</p>
	そで山	そで幅	そで丈	そで下	そでぐり																						
20°	2.7	23	30	27.3	24																						
30°	4.6	23	30	25.4	26																						
40°	6.5	23	30	23.5	28																						

参 考 資 料 2

授業後の感想（そでの型紙のなりたち）

— 意 外 性 —

- そでの型紙が、丸い筒のできるなんて思われなかった。
- こんな物（円筒）で、服のそでの型紙を作るなんて、びっくりした。
- そでの型紙を私が作れるなんて思ってもみなかった。

8%

— 成 就 感 ・ 満 足 感 —

- 全部完成できたなんてウソみたい。
- 友をたよらないで完成した！
- 全部完成できて、とても嬉しい！
- 全部完成できて、良かった！
- 不器用な割に、早くできた

5%

— 有 益 性 —

- そで山の高さのちがいによって、腕のあがり方がちがうことがよくわかった。
- そでの型紙の種類がよくわかった。
- 型紙を作ってみて、いろいろなそでがあることがわかった。
- 型紙の作り方がとてもよくわかった。
- この実験をやって良かった。
- この実験をやって、とてもためになった。

16%

— 意 欲 的 —

- 家でまたやってみたい。
- 今度は、1人でそでだけや、そでぐりを自分に合わせて作ってみたい！

3%

— 困 難 性 —

- 思ったより、むずかしかった。
- 意外とむずかしかった。
- 最初考えていたとおり、むずかしかった。
- 簡単すぎると心配していたけど、思ったより時間がかかった。
- 思ったより、時間がかかった。
- わりと大変だった。
- 少しめんどくさかった。
- 少し不正確になってしまった。
- もう少ししていねいにやればよかった。

35%

— 容 易 性 —

- 思ったより、単純にできるんだなぁと思った。
- 思ったより、簡単だった。
- 初めはむずかしい感じがしたけど、作っているうちに簡単に思えた。
- あんまり、時間がかからなかった。
- わりと早くできた。
- とても面白かった。
- とても楽しかった。
- たのしく、実験ができた。
- 面白かったので、無我夢中になった。

28%

— 挫 折 感 —

- 準備が不十分だったので初めもたついた。
- ビニールを不正確に切っていたので、不正確になってしまった。
- 最初に思いちがいをしていて、やり直した。
- ※そで山線にビニールの端を当てていた。

3%

— 実 験 方 法 —

- 写す時は、ルレットもガラスも同じだ。
- ビニールがつつやして、やりにくさが伴うと思った。

2%

参 考 資 料 3

授業後の感想（帽子づくり）

—— 成就感・満足感 ——

- 頭に、ちょうど合ったので良かった。
- 初めて、立体的なぼうしを作った。
- 何とか、ぼうしになって良かった。
- うまくできた。 ○かわいいのができた。
- 完成したから嬉しい。 ○まっまっうまくできた。
- 今日中に完成した！ やったー。
- 今日で完成してよかった。
- とても良い経験をした。
- 全部終わったので良かった。
- 今日中に終って良かった。
- 何とか、帽子の形になったので良かった。
- 帽子を初めて作って案外そうむずかしいものではなかった。
- 短時間で、帽子ができるのはすばらしい。
- わりと帽子らしい形になった。
- うまく縫えた。 ○面白い帽子になった。
- 全部出来て良かった。

30%

—— 有益性 ——

- 型紙づくりがわかってきた!!
- 帽子の型紙を作るととてもためになった。

3%

—— 応用・発展 ——

- もう一度家でも作ってみたい。
- 家でも作ってみようと思う。

3%

—— 困難性 ——

- しるしつけがむずかしかった。
- とてもむずかしかった。
- 型紙づくりに手間だった。
- 思ったより時間がかかった。
- 大変だった。
- むじかしかった。
- とても大変だった。
- 型紙づくりって大変だ。
- めんどくさい。
- 大変つらい。
- 一番時間がかかったのが型紙づくりだ。
- 時間がかかった。
- 小物なのに時間がかかるし、大変だった。
- 簡単そうだったけど、意外とむずかしかった。
- 型紙から作るのは良いけど、むずかしかった。

33%

—— 興味・関心 ——

- 自分で型紙を作って、たのしかった。
- 簡単に型紙がつくれた。
- とても簡に作れて面白かった。
- 結構早くできた。
- 思ったよりも、簡単にできた。
- とても大変だけど、型紙づくりからやれたので面白かった。
- 型紙をつくったのが初めてだったけど、たのしかった。
- 結構、簡単にできた。
- 結構、面白かった。

21%

—— 挫折感 ——

- 型紙を浅く切り込んだので、お皿のように広がった帽子になった。
- 形が思うようにならなかった。
- あまりうまくいかなかった。
- 形が変っている。
- 失敗したためやり直した。
- しるしが表に出てしまった。
- 形がどんがってしまった。
- 4枚はぎにすればよかった。
- くやしい。もっとうまくいくはずだったのに!

10%